

# 新会長挨拶

## 学会の次の50年に向けて\*

池 道彦 Michihiko Ike



博士（工学）

昭和62年 大阪大学大学院工学研究科博士前期課程修了  
同年 久保田鉄工(株)(現(株)クボタ)入社  
平成2年 大阪大学工学部助手  
11年 同大学大学院工学研究科助教授  
18年 同大学大学院工学研究科教授  
令和4年 同大学COデザインセンター長（兼任）  
日本水環境学会学術賞

2023年6月13日開催の第136回理事会において本会の会長を拝命いたしました。何かと力足らずですが、本会がさらに発展するよう尽力して参りますので、宜しくお祈りいたします。

本会は、1971年に前身である日本水質汚濁研究会が設立されてから2021年に50周年を迎え、COVID-19の流行により1年遅れとなりましたが、昨年無事50周年記念式典を開催することができました。このような重要なタイミングで会長を引き継ぐこととなり、本会の積み上げてきた歴史に大変な重圧を感じていますが、任期の2年間の目標としては、あえて大きく「学会の次の50年の礎」となることを標榜したいと考えます。本会が向かっていくべき将来の姿、会員の皆様方の本会への期待に常に応えていくことのできる姿を、いわば（これまでの50年+次の50年）「百年の計」として構想し、新たな歩みを進めていく始まりにしたいという思いです。

先頃、本会の「百年の計」にもつながる、中長期的な活動の指針を提示した『日本水環境学会 将来ビジョン』が、西嶋渉前会長のもとで取りまとめられました。このビジョンでは「未来社会における人間の営みと水環境の調和」を大きな目標に掲げ、以下の6つの具体的な取り組みの方向性を提示しています。

- ① 陸上から供給される物質と水環境における物質変換過程の理解の深化
- ② 未来社会の水需要に応える革新的水質制御技術の開発と持続可能なシステムの構築
- ③ 世界の水問題解決への貢献
- ④ 将来の水環境を支える次世代の教育への取り組み
- ⑤ 社会的関心や緊急性の高い水環境問題の調査研究と情報発信
- ⑥ 異分野および多様な主体との連携・協働による超学際的取り組みの推進

まずは、これらの取り組みの具現化に着手し、さらにその先を見渡し、見据えるための多様な議論の場を創っていくことを仕事としたいと思います。

『将来ビジョン』で提示された取り組みのうち、①、②、③、⑤は、会員の皆様による従来の研究、調査活動や交流、関連した情報発信、啓蒙活動等の延長線上にあるといえます。本会としては、そのポテンシャルとアクティビティをさらに高めていくための支援策を整備し、展開していかなければならないと考えています。

次世代の教育（④）に関連する最近の動向として、少子高齢化が進むなか、水環境に係る分野においてもすでに産官学すべてのセクターでの人材不足が顕在化しています。さらに、より複雑な問題に対応できる、高度な能力を持つ人材の育成が求められるようになってきています。これらの現状を踏まえると、本会にも、これまでとは違った形で人材育成への貢献が必要であると思っています。今後の議論が要りますが、大学等の教育機関とは異なる視点で、各セクターで求められる人材像を明確化するとともに、その育成につながるコト創りを企画することが考えられます。

個人的には、異分野および多様な主体との連携・協働（⑥）にどう取り組んでいくかが、本会の将来にとって最も重要なのではと感じています。私の研究対象である下水処理分野では、技術開発の主眼は、下水中の汚濁物質を除去する処理から、下水の持つ化学・熱エネルギーや栄養塩類等資源の回収と利用に移ってきており、従来の水環境工学分野の研究者のみでなく、エネルギー、農業やホワイトバイオ（モノ創りバイオ）等他の分野の研究者との連携によってこそ、将来あるべき下水処理システムの構築が可能になるというのが共通認識となっています。また、このようなシステムの実装には、社会経済面での制度設計やリサイクル文化の醸成など、既存のセクターを超えた仕組み作りも必須となります。本例に見るように、水環境分野の多くの領域では、多様な主体間での高度な連携・協働が望まれるようになってきており、異分野・異業種連携体の形成や展開を主導していくことが、本会の大きな発展に結びつくように思います。水に関わる分野が結集する連合学術集会の開催、従来接点のなかった他学会とのネットワークの構築、産官民学で取り組む調査研究の企画などが、すぐに思いつく取り組みです。さらに、皆様からアイデアを募り、時間をかけて頭をひねれば、今までなかった水環境研究の新領域を切り開く契機となるような、全く新しいアプローチもありそうな気がします。

本会が次の50年に歩み出す足固めを始めます。新メンバーとなった理事会を中心に、鋭意努力して参りますが、何よりも会員の皆様方が頼りです。ご指導ご鞭撻のほど、そしてご支援ご協力いただきますよう宜しくお祈り申し上げます。

\* Toward Next 50 Years of Japan Society on Water Environment